

皇居新宮殿の造園設計と施工

Landscape Design and Construction of the Imperial Palace, 1968

鈴木 誠* 細井さと子* 服部 勉*
Makoto SUZUKI* Satoko HOSOI* Tsutomu HATTORI*

1. はじめに

本報は、1968年に完成した新宮殿造営の公式記録『宮殿造営記録』¹⁾〔以下引用を(記録、頁)と略記〕、並びに市販の宮内庁蔵版『宮殿』²⁾〔同様に(宮殿、頁)と略記〕を参考にしつつ、この「記録」、「宮殿」に記載の少ない造園設計と施工について論説するものである。

本年(2008年)は宮殿造営から40年を迎えこの造営に係わった関係者の数もわずかになっている。そこで、この歴史的建造物であり国家的モニュメントともいえる宮殿の造園設計・施工について「記録」「宮殿」並びに各種文献に散見される造園関連記事³⁾、当時の担当者の一人であり造園関係者として中心的役割を果たした元宮内庁庭園課長、國方島夫氏が作成し保管していた宮殿造営時の設計施工メモ、そして國方氏の記憶(インタビュー記録)⁴⁾に基づき、記録して論説することとした。

なお、この論説をまとめる背景には造園に関わる諸活動、並びに造園作品の創作に関わる多くの事実が、歴史

的記述として後世に伝わるように記録されていない、というもどかしさがある。遠い過去に遡らなくとも、近代ランドスケープ遺産の記録でさえも、積極的努力がなされてきたとはいえない⁵⁾。現在その一部は日本造園学会の「ランドスケープ作品選集」や「海外の日本庭園」調査報告書、あるいは学会誌ランドスケープ研究の「ランドスケープ・プロジェクト・ナウ」などとして記録されている。そして、同様な役割をこの「造園技術報告集」に期待したことが、この論説となった。

2. 皇居新宮殿造営の経緯と造園設計

太平洋戦争後の復興が一段落した昭和30年代(1955～)、皇居を移転して新皇居を造営し現皇居を一般開放すべき、という内容の皇居開放移転論がおこった²⁾³⁾。国ではこの課題に対応し、検討委員会「皇居造営審議会」(大野伴睦委員長、1960年6月～10月)を組織し、この件を審議した。その結果新宮殿は旧宮殿跡に新しく造営する

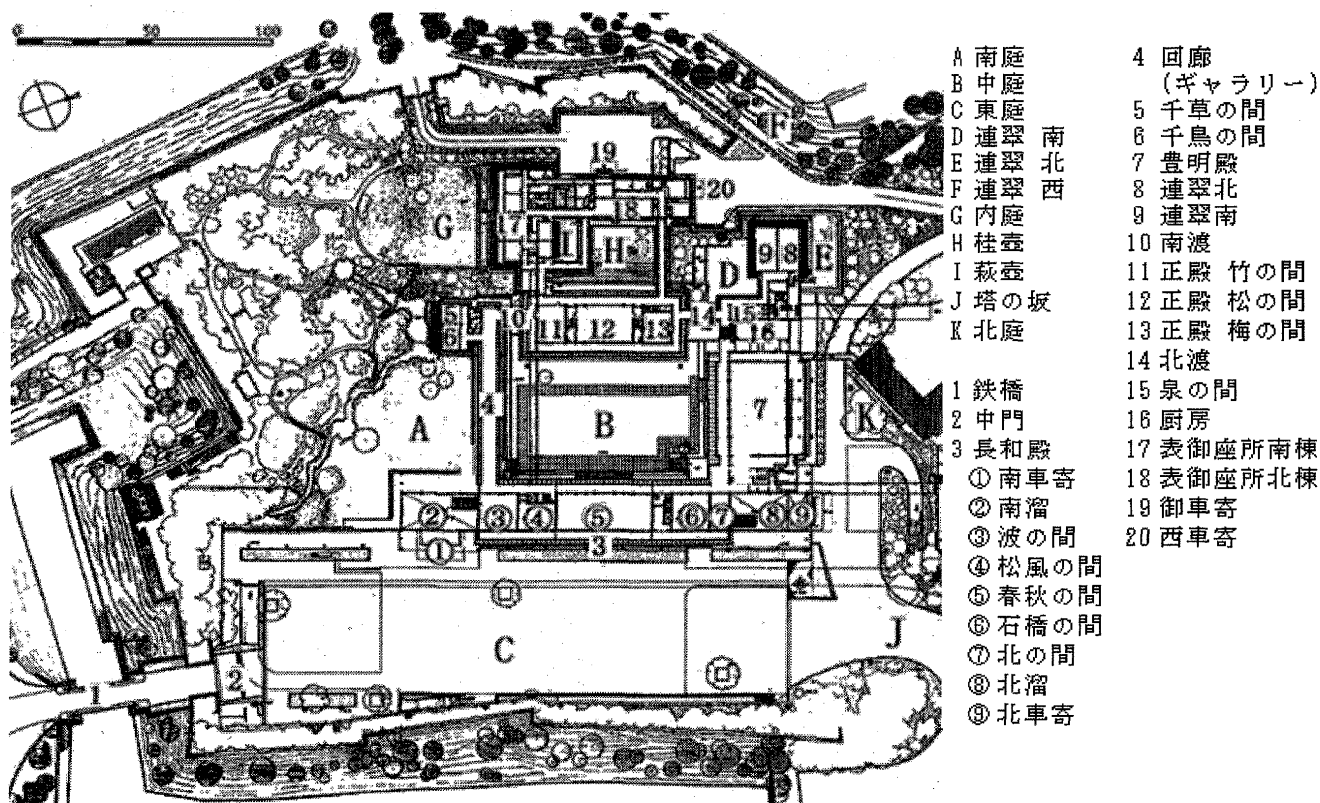


図-1 皇居新宮殿 全体図⁵⁾

*東京農業大学地域環境科学部造園科学科

*Dept. of Landscape Architecture Science, Tokyo

こと、新しいお住居は吹上御苑内に造営すること、皇居東側地区は皇居付属庭園（現皇居東御苑）として整備し開放することなどを決定した（記録、173）。

1960年宮内庁に皇居造営機構が設けられ、新宮殿の基本設計者として吉村順三（当時東京芸術大学助教授）を指名し、顧問に内田祥三（東京大学名誉教授）ほか数名を委嘱した（記録、173）。1963年3月吉村による基本設計が完成し、引き続き宮内庁に設置された臨時皇居造営部（高尾亮一郎長）により実施設計が開始された。基本設計段階で、吉村順三による庭の概略設計はあった⁷⁾。しかし、宮内庁と吉村との方針の違いにより、以後吉村は設計を降りてしまう⁸⁾。1963年11月、宮殿造営顧問として吉田五十八が委嘱される。そのこともあって庭園については、奥多摩で吉田と協働して玉堂美術館の庭園を完成（1961年3月）させていた中島健に設計依頼の下話があった。具体的には高尾亮一が玉堂美術館庭園を視察し中島に依頼をした⁹⁾。しかし中島は「庭園を主体に考えると建物の設計の変更をお願いすることになるかもしれない」という意向をもっていただけ、中島による設計の話は立ち消えた。結果的に、宮内庁内部での造園設計とし、木村雅寛 平栗徳雄、國方島夫の3名が担当し楠岡悌二（宮内庁嘱託）が補佐にあたった。

宮殿建築工事は大手ゼネコン5社（大林組、鹿島建設、清水建設、大成建設、竹中工務店）のJV（宮殿造営工事共同企業体）が請け負った。造園工事は宮内庁職員に加え、当時の宮内庁出入りの業者や指名参加名簿から選出され、やはり大手造園会社のJV（富士植木、日比谷花壇、檜木造園土木（後に加勢造園に替る）、東光園緑化、昭和造園、の5社）が組まれ建設JVの下請けとなった。

3. 皇居新宮殿の造園設計方針（國方メモより）

【宮殿の様式に配慮する】

宮殿の様式（建築設計方針）

- ・日本古来の美しい伝統建築／つくられた時代を象徴するもの／新しい材料と工法で表現／現代を象徴する建築／「威厳より親愛を、莊重より平明を」を目指す

【造園設計の方針】

- ・建物との調和を保つこと／品格を備えること／伝統を現代に活かすこと

【材 料】

- ・自然のままの樹石とする／樹木は生育のよい樹種の中から立地条件に適応しその場所にふさわしい形状のものとする／全て優秀な一級品とする

【特 記】

- ・植物材料は生育するに従いその形状が予想外に変わることがあるので、植栽の設計に当たってはそのことを考慮し、その組み合わせを誤らないようにする／建物からの景観を考慮する／その場所に最もふさわしいものとする／各庭は異質な要素を含むこともあるが宮殿の庭として統一的な造庭精神をもって貫く

4. 造園設計・施工に関わる準備事業

設計施工に先立つ準備事業として、皇居内の毎木調査を実施した¹⁰⁾。将来も健全であろう樹木を選び、それらの種から苗木を育成した。実際に苗木を作った主な樹種は、マデバシイ、カヤ、シャリンバイである。

またクスノキについては、熊本県内にあった専売公社塩脳部で育てていた苗木を約400本譲り受け育成した。当時東京では、クスノキの種を蒔いても寒さで枯れてしまう状況だった。そのため、防寒対策として冬期では苗木周辺に葉付きの笹竹を挿して風を防いだ。苗圃は赤坂御用地内の、後に三笠宮寛仁邸が建つ場所を利用した。広さは約600坪（約0.2ha）。これらのクスノキの苗木は苗圃で4～5年育成し使用した。

宮殿造園の主景樹木をケヤキにした¹¹⁾のは、毎木調査の結果300年以上の樹齢をもち最も長く生育している事実が判明したこと、ケヤキの樹形が宮殿建築のデザインにも合い、また四季感をもつ、などという理由からである。主要なケヤキは根回しをして2年置かないと移植が出来ないため、事前に施工工事とは別途発注した（昭和38～39年、1963～64年頃）。これら的大ケヤキは業者（日比谷花壇）が探してきたもので、浦和市内の療養所の庭や神社、畑の境界（木）などに植わっていたものである。

なお、ケヤキ以外にも庭石を別途外部発注している。

また、明治宮殿時からあった鳳凰のブロンズ像（大正天皇への献上品一対）、周防多々良石、水盤（噴水）、赤玉石（吹上御苑より）は、新宮殿にも置くことになった。

5. 新宮殿内各庭園の設計と特徴

以下新宮殿内の特徴をもつ9つの庭園区画について、まず「宮殿」に記述された内容を引用し、次に「國方メモ」並びにインタビュー結果から、それぞれの造園設計と施工に関する技術情報としてまとめた。

（1）南庭

「回廊と千草・千鳥の南にひらけているのが南庭である。いちめんの芝生の向こうが山の斜面になり、その山裾を流れがめぐっている。流れは奈良県産の貴船石でつくられてあり、水は千草・千鳥の間の前面で数箇所滝になって落ちる。滝の周辺には小熊笹の中に、檜・朴・シデ・コブシなどが植えられてある。年と共に自然林の趣きを見せることであろう。その東隣り斜面は大刈込みになっている。」（宮殿、178）

南溜（正面玄関）よりの第一印象に配慮した景観構成を意図した。背景となる屋根・白壁と調和した植栽として芝生の広がりの中に建物近くにはクロマツを配植し、芝生園地内に大木のケヤキ1本を入れた。その位置は、建物内の回廊を歩く人が視線を向けるように意図し、その背景には江戸城の伏見櫓が散見されるように考慮した。しかしその後、桜田門外に警視庁新庁舎が完成したため、豊明殿からの目隠しを意図して、後に南東側にケヤキ1本を追加した。

南側の旧江戸城山里丸であった斜面を利用して大刈込の植込みとし、その地形を生かして斜面と平坦地をつなぎ埋めるように流れと滝を造った¹²⁾。ここは谷川の景色（ワサビ田風）の演出を意図した。当初、実際にワサビ田の造成を検討したが、ワサビは水温が15℃以下でないと生育しないことなどにより断念し、現状のような流れとした。流れの水の補給は地下水を利用した。

流れ石組の構成石材として、当初は品格のある貴船石の使用を考えた。しかし、すでに本物の貴船石を京都貴船では産出しておらず、採取も禁止されていた。探したところ、奈良県の本津川上流の土木工事現場にて類似の輝緑凝灰岩が現場発生材として購入可能なことがわかり、900 t を外部発注して調達した。貴船石の一部は本物を京都の平山庭石店から購入し使用した。ただし、南庭の流れ最上流の滝石組みの鏡石だけは大きいものがなく、鬼石（群馬県鬼石産の三波石）を使用した。

なお、この流れでは、昭和48年～56年（1973～1981）

にかけて昆虫学者矢島稔の提案で、人工的にゲンジホタル・ヘイケホタルの幼虫やカワニナを入れ、ホタルの生育を図った。カワニナは水温が高いと死滅してしまうので、皇居内の井戸水を補給して使用した。

庭園の敷石は、筑波石と丹波石を使用した。筑波石は千鳥・千草の間の建物下にかかる部分に使用し流れとの連帯感を演出した。丹波石は内庭と千鳥・千草の間との間のシュロを植栽した部分の敷石として使用した。

（２）中庭

「正殿の前庭は、中庭と名づけられている。北に豊明殿、南に回廊、東に長和殿があつて、これらにとりかこまれた庭である。京都紫宸殿の南庭に相当する。しかし京都御所のような十八階段もなければ、左近の桜、右近の橘もない。面積約4,800㎡。いちめんに和歌山県産の白い卵形の砂利が敷きつめられ、そのなかを御影石の園路が巡っている。」（宮殿、180）

「また、庭の東南隅には、明治の宮殿の豊明殿中坪に

表－１ 新宮殿内各庭園の概略

名称	位置	概要	設計方針	空間構成要素		面積㎡	施工会社
				主要植栽	その他		
南庭	千鳥・千草の間前	内庭とギャラリー前との間。殆どが緩勾配の斜面。	内庭とギャラリー前との間の庭なので、両庭を融合させる。	シイノキ、ハンノキ、ナラノキ、ソロノキ、マテバシイ、ネズミモチ、サンゴジュ、コブシ、ホオノキ、ケヤキ、クロマツ、ドウダシ、ツツジ、イヌツゲ	築山、流れ（青色貴船石・青色貴船類似石、筑波ゴロタ石敷き、青石、自然石）、園路、池	約5900	富士植木
	回廊南側	ギャラリー棟の南側に広がる平坦地、それに続く斜面と、その裾を走る流れで構成。	庭全体として重量感を出す。				
中庭	正殿前	儀式室棟、大食堂等、大広間棟及びギャラリー棟に囲まれた長方形の庭。	四季の変化を楽しめるようにする。	ウメ（紅白）、刈込（灌木15種類）	園路（花崗岩）、敷石（白那智砂利）、水盤（青銅製）、園路燈（合成樹脂）	約4600	日比谷花壇
東庭	長和殿前	宮殿敷地の東側土塁と大広間棟との間。南端は中門を経て鉄橋に接し、北端は坂に続く。	石敷き広場の機能の發揮と、大広間棟との調和。	ケヤキ、カンツバキ、サザンカ、イヌツゲ、クスノキ、タブノキ、モチノキ、ツツジ	敷石（由良石）、仮設便所、伏見櫓、燈籠（有田焼）	約15000	日比谷花壇
連翠南	小食堂棟南	小食堂棟、小食堂回廊、儀式室棟に囲まれた庭。水面が主体。	池内に3個の庭石の石組を置く。	ツバキ（紅白）、モッコク	池（コンクリート杭打）、置燈籠（花崗岩製）	約950	昭和造園
連翠北	小食堂棟北	新たに積まれた石垣上の台地。狭小だが、借景は雄大。	借景を引き立てるとともに、十分鑑賞できるようにする。赤玉石3個の石庭。	サツキ、カンツバキ、クチナシ、クロマツ	借景、敷石（白川砂）、置石（赤玉石）、置燈籠（花崗岩製）	約360	東光園緑化
内庭	御座所棟前	南部は江戸城の山里丸といわれた樹林で、庭はこれを背景として3つの築山を設ける。	明るい庭にする。築山（ブンゴザサの山・サツキの山・芝とウメの山）	シイノキ、モチノキ、クロマツ、クスノキ、モッコク、トウジュロ、タブノキ、モミジ、ブンゴザサ、カクレミノ	樹林（山里丸跡）、築山、流れ（貴船石）、園路（木曽石ゴロタ）、蹲（花崗岩）、置石（赤玉石）	約9000	富士植木
桂壺	表御座所付属棟中坪	儀式室棟裏側と表御座所附属棟との間の庭。表御座所附属棟からの眺めが主体。	御車寄・休所（3室）より夫々の景を中心とする。	カツラ、コグマザサ、イヌツゲ、山型の刈込（ツツジ・ツゲ・サツキ）	置石（貴船石）、敷石（白川砂）、積石（安山岩）	約560	加勢造園
萩壺	表御座所中坪	御座所の北側、御食堂前の坪庭。	四季の変化を楽しめるようにする。	ハギ（紅白）	敷石（白川砂）、置石（貴船石）	約135	昭和造園

宮内庁編（1982）：宮殿造営記録：宮内庁刊の記述を基に、國方島夫氏へのインタビューにより作成

噴水として使用されていた青銅製の水盤を据え、水の噴出をやめて、湧水を周囲から落とすこととする。」(記録、167)

正殿は宮中儀式を行う場所であるため清涼感のある白砂利敷とした。白那智砂利(和歌山県那智海岸産)は、約 300 t を東京の老舗石材店である豊前屋庭石店を通じて購入した。京都の紫宸殿の前には右近の橘、左近の桜が配されているが¹³⁾、ここでは左側に白梅(群馬県赤城産)を力強いイメージに植え、右手には植栽せず中庭の対角の位置に紅梅を5本、下向を隠す形でやさしいイメージとして寄せ植えた。これは、久恒秀治『京都名園記』中の「南殿の庭には梅を植える」という記述を参考としたものである。また、当時の風潮としても対称的な形は古くさいとされていた。なお、紅梅5本は各地から持ちよったものであったため、開花時期がそれぞれ異なる事が施工後に分かった。そのため、咲く時期が合うように後に別のものに植え替えた。

軒下の刈込生垣は15種類の灌木を寄せ植えして芽出し、花、紅葉などの四季の変化が楽しめるよう考慮した。現在、真中に一条の空間をもって二列状の生垣になっているのは、軒先からの雨だれ(屋根材の緑青)による被害から生垣を守る目的にて後に修正が加えられたもの。

当時の敷砂利は黒那智砂利の使用が多く、白那智砂利の使用例は稀であった。しかし、白い丸石の方が周囲ともデザインの合うとの見解から白那智砂利を使用した。しかし、一気に特定の石を大量に集めることで市場価格が上昇する恐れもあり、半年をかけて石材業者(豊前屋庭石店)に専門業者(岡室基石店)から入手させた。

「なお、中庭には園路にそって、合成樹脂製の庭園燈3基を配置する」(記録、167)が、このデザインは、宮殿内シャンデリアの一部も手がけた多田美波が担当した。

(3) 東庭

「中門に立つと、面積 15,000 m² の宮殿東庭が一望にひらけてくる。香川県産の青と黄の安山岩が、整然と敷きつめてある。」(宮殿、176)

東庭は一般参賀で多くの人々が集う場所であることから、香川県産の青と黄の安山岩(由良石)の敷石で一面を覆い、その所々に大木のケヤキを点在させた。当初の植樹候補はクロマツであったが、マツのザイセンチュウなど害虫の問題や暴風に弱いということから、高床式の建物に合い、関東地域古来の風景にも合うケヤキとした。ケヤキの位置は参賀の時に邪魔にならないように中心を外して配植している。地下には駐車場(大型自動車約120台収容)が位置しているが、このケヤキの植栽地盤は地下まで土壌を確保した。4本中3本は地山から、中央1本が駐車場の中から生えている形になる。庭の東側はクロマツとクスノキにより囲むような植栽とした。

東庭が長和殿と接する所には幅2mのカンツバキ(愛知県稲沢産。参賀があるので正月に咲く花として白花のサザンカである品種名フジノミネを混植。カンツバキ:

フジノミネ=3:2の割合)の植込みを配し、植込みから磁器製の有田焼灯籠11基が火袋をのぞかせる。

「東庭の西北隅に松の塔と名付けられた照明塔があり、鉄橋の中心線を延ばすと、庭を対角線に横切ってこの塔に達する。したがって鉄橋から入る人は正面遠方からこの塔を見出すことになる。(中略)塔は若松の葉をかたどったもので、先端に古代婦人の装身具「くしろ」の形をとった円輪がついている。高さは16m。躯体を緑青発色した銅板でつつんである。照明装置を内蔵していて、夜になると葉と葉のあいだから照明の光が放出される。この塔は宮殿の建物と庭とを有機的に連ねる意図から構想されたものである。」(宮殿、176)

松の塔の由来の一つは、昭和天皇の御徴による。

「中門と、長和殿沿いの燈籠と、それにこの塔とは国民からの造営費として寄せられた寄付金によってつくられた。寄付金の総額は96,161,400円に上っている。」(宮殿、176)。

東庭と二重橋濠との間の土手には明治宮殿の時からクスノキが植えられていた。それが火災によって損傷したので成木のクスノキを補植した。このクスノキは戦時中に苗が配られて育てられていたものを、安行の植木職人が千葉の房総半島から探してきたものである。

(4) 連翠の庭

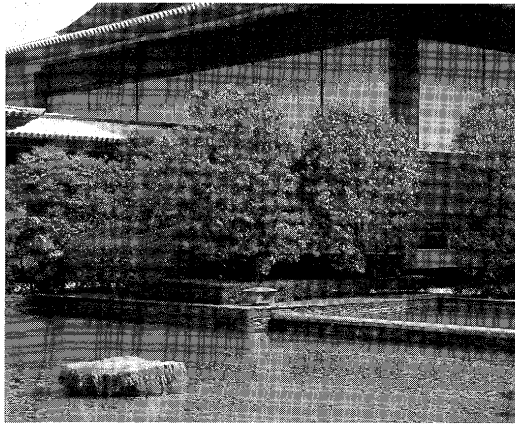
小食堂連翠に付属する北側と南側、そして西側に広がる空間である。当時「サツキの庭」と言われたが、“みどりがつながる”=“連翠”ということから「連翠の庭」の呼び名が定着した。

1) 連翠南庭(写真-1)

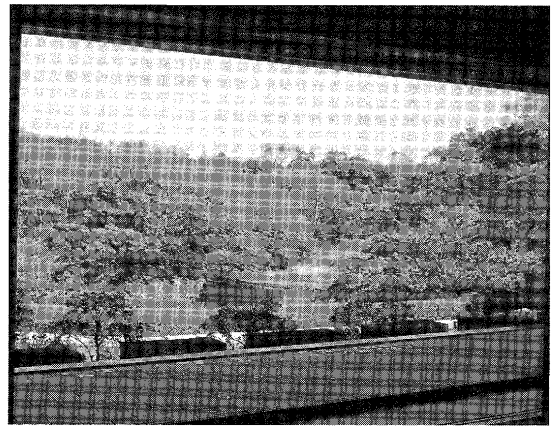
「南側の庭には大きな池がある。池は二段になっていて、上段の水が段差で下段へ流れ落ちる。下段の池には岐阜県産の自然石が三個配置されてある。池をめぐる椿やモッコクが植えこまれている。」(宮殿、179)。

方形の池と直線に流れ落ちる滝によって、現代的な庭とした。建物のラインにあわせて直線の滝を作った。滝のエッジはノコギリ状になっていて、水の動きと音を演出している。連翠南の間は前席なので、動きがあった方がよいということからである。池は水深を浅くして、池底の鉄平石の乱張の模様が楽しめるようにし、池の縁石に秩父青石を用いた。周囲はツバキで囲って目隠しし、池中には3石の石組がされているが¹⁴⁾、これは陶芸家荒川豊蔵が岐阜より献上した石を使用した。全部で5石が献上されたが、3石は連翠南庭の池中に高尾亮一が石組みし¹⁵⁾、残り2つは北車寄のケヤキ下に配石した。

また、連翠の水辺の岬灯籠はハワイの日系人より寄進を受けた375,000円(当時)をもって皇居内の石垣石(桜御影)を用いて制作した。このとき桐材による木材模型をスケール1/10で制作してデザインを検討した。小倉茂が設計し、石材加工は小倉庭石店が担当して筑波の石工が実施した。火袋の形は連翠の間の中にある芹沢銈介作の額絵「春と夏」と同じ形にするよう高尾亮一が修正指



写真－１ 連翠南の間から見た連翠南庭



写真－２ 連翠北の間から見た連翠西庭

示した。北庭にもこれと同じ灯籠を置いた。

2) 連翠北庭

「北側の庭は、周囲にサツキの植込みをめぐらし、それに松・クチナシ・寒椿をまぜている。中央はいちめんの白川砂（京都産）。白砂の上に置かれた巨大な三個の佐渡赤玉石。白と赤の対照が美しい。この赤玉石は江戸時代佐渡奉行から幕府に献上され、吹上のお庭に据えられてあったものを、ここへ移されたのである。庭のはるか彼方には本丸の石垣が見え、石垣上の富士見多聞櫓の白壁が印象的に視野に入ってくる。」（宮殿、179）。

皇居内の樹木・樹林の借景を主としたテラス状の庭とし、白砂利敷きの中に江戸城以来伝来の佐渡の赤玉石を3つ使用して枯山水（石庭）とした。

四角い切石（真鶴石 60×60×90cm 皇居内の石材ではなく豊前屋庭石店より購入）を、間を空けて置き内と外との仕切りとした。大きな塀では連翠から借景が見えなくなり、小さな垣では建物とは合わないので切石を置くことにした。赤玉石3石の内2つは元々、吹上御苑観瀑亭脇にあったもの、もう1つは旧御馬検所横にあった。なお、切石垣のデザインと石組は國方島夫が担当した。

宮内庁庁舎が見えるので、モチノキを植えて目隠しとした。また視線を集め、かつ後ろの景色（本丸の石垣、富士見多聞櫓の白壁）にも視線が通るように、赤玉石の後ろに仕立物のクロマツ3本を配植した。

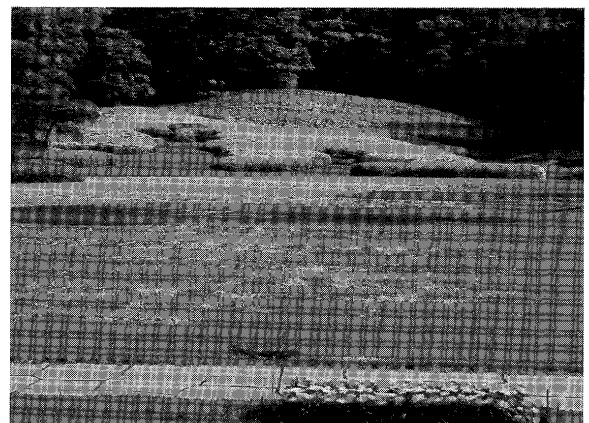
3) 連翠西庭（写真－2）

連翠北の間の窓から西方向に見える借景部分を便宜上西庭とここでは呼ぶことにする¹⁶⁾。

連翠の間の床高を調節して遠方（西側・北側）の景色の見え方を整えた旨の記述がある¹⁷⁾。しかしこのとき調節したのは床高だけではなく、借景となる樹林・樹木も自然な景色になるように景色を整えた。西側への眺め（西庭）は皇居内の紅葉山と道灌濠が借景として美しく見えるように、周辺樹木を整枝剪定し、補植も行った。

（5）内庭（写真－3）

「南棟の前面には内庭がひろがる。園路のある芝生の庭で、東側は南庭につづき、西側は五条の筋つきの塀にとりかこまれている。南側の芝生のさきは築山となる。



写真－３ 表御座所南棟から見た内庭

この附近一帯はもと江戸城山里丸の地である。山里丸から吹上御苑へ通ずるところに内苑門がある。昔の形式を踏襲したうつくしい小門である。」（宮殿、180）

五条の筋つきの塀は在来のものである。この庭園は昭和天皇が御政務の合間、御気軽に御散策されることを意識し四季変化のある明るい空間を演出した。そのために広い芝生、その向こうに三つの築山を配置。その山を特色づけるため、ブンゴザサの山、サツキの山、ウメを配した芝山¹⁸⁾という配置となった。南側の在来樹林の中には、ご要望によりヤマボウシを植えた。

警視庁新庁舎が完成し、庁舎から中の様子が見えてしまうので目隠しのクロマツを追加した。そのクロマツの近くに人間大の鳳凰のブロンズ像が置かれている。

園路の石は当初桜川砂敷であったが、後の管理や歩き易さから主要な部分を木曽石ゴロタの乱張りに改修した。表御座所南棟の近くに、皇族方の御休所として利用される「バラの間」と呼ばれる部屋がある。この部屋の前の植栽にはバラを取り込み、また、皇居内にあった残りの赤玉石を置いた。表御座所棟と千鳥・千草の間との間には地盤に約4mの高低差がある。その段差には余った石で崩れ石積みの石垣にした。この御休所内から外は見えるが、外からは見えないようになっている。庭の見切りとして高さの変化をつけたトウジュロの列植をした。

御座所の近くに植えてあるツツジの脇にアメリカデ

ゴが植えられているが、これは後の補植。宮内庁職員官舎内にあって大きく育ったものを、官舎取り壊しの際、侍従を通して昭和天皇に移植を提案したものである。

庭園内のカナダカエデはカナダから、ポトマックサクラはアメリカから、ボタンは日中友好協会から献上されたもので、これらは回廊より望見されるよう配植した。また、ヒマラヤスギの大木は明治宮殿時代からのもの。

(6) 壺庭

1) 桂壺

「北棟と正殿とのあいだは四方を建物でかこまれた壺庭である。西南隅に桂を植えてあるので桂壺と呼ばれ、南辺をめぐる廊下は桂廊下と名づけられている。桂のほかには寄せ植えの刈り込みがあり、その他は白砂利が敷きつめてある。庭の正殿寄りには、城郭の「武者走り」に似た安山岩のうつくしい石積み斜面になっている。正殿は高床なので、長和殿から見ると正殿の床下をへだててこの斜面が目につく。」(宮殿、180)。

カツラ主体の庭で、狭い空間を垂直に伸びるカツラの幹と、新緑・黄葉を楽しめるようにした。北御車寄から宮殿にまっすぐ入ると、中庭の向こうに廊下が見えてしまう、これを隠す意味でもカツラの群植は効果をもつ。

この庭の由良石の石積み斜面は、東庭の石を切り出した時にでたものから適当なものを選び、建築サイドで設計施工したものである。庭園の主景は白川砂を海に、石を岬・滝に見立てて構成した。

現状コウヤマキの生垣は、当初ツゲの生垣であった。これは生垣が低く客人から廊下が見えてしまうため改修した。また、山型の灌木刈り込みは廊下より侍従と客人との間の目隠しの役割も果たしている。

2) 萩壺

「桂廊下と南棟のあいだにも、もう一つ小さい壺庭がきている。白川石を敷いた上に、三個の石が置かれてある。背景は桂廊下背面の白壁。この白壁に沿って、それよりも低いもう一つの白壁の塀が走る。塀には一文字瓦を葺いてある。北西隅に紅白の萩が植えてあるので、この庭を萩壺という。龍安寺石庭を連想させるような好もしいたたずまいである。」(宮殿、180)

紅白のハギを白砂敷きの中に配植し、清楚な感じの中庭とした。冬場には景色を演出するための適度な刈込とし、春先の枝の伸長を待つようにした。

5. おわりに

「記録」の解説編はA4版全758頁の大冊。しかし、8頁にわたる目次に登場する「造園」の文字は、第5章 実施設計の概要の「第4節 造園」のみで、その本文頁数は7頁(167-172)しかない。この論説が、「記録」を補い宮殿造園の記録として、後世に役立てば幸いである。

最後になるが、快く資料提供、インタビューに応じていただいた國方島夫氏に重ねて御礼申し上げる。なお、提供を受けた各種資料、造園当時を記録した8mm映画

(VTRビデオに変換編集済みのもの)、スライド写真一式は、東京農業大学造園科学科造園情報センター内の「近代ランドスケープアーカイブ」に保存させていただいた。

文献並びに注

- 1) 宮内庁編(1982): 宮殿造営記録 解説編・図面編、宮内庁、758p. (非売品)
- 2) 渡辺義雄[撮影]・原弘[構成]・高尾亮一[解説](1969): 宮殿、宮内庁蔵版、毎日新聞社、176-180(解説頁)
- 3) 関連資料 週刊読売 臨時増刊 特集新宮殿 1968年11月21日号、読売新聞社、徳川義寛(1969): 皇居新宮殿、保育社、153p.
- 4) インタビューは2008年4月26日、6月3日、7月1日、7月31日に、鈴木誠、細井さと子、富田恭子、松本開地が國方邸にて各種資料提供を受けつつ実施し記録を作成した。
- 5) 文献2の付図を加工して加筆。
- 6) 鈴木誠(2007): 近代造園研究の取組と展望、ランドスケープ研究70(4)、256-262
- 7) 「昭和の新宮殿」毎日グラフ別冊第9年第8号、毎日新聞社、1968.12、76-77に吉村の概略設計図(B3版)が載っている。
- 8) 阿部貞二(1968) 新宮殿ができるまで 毎日グラフ別冊第9年第8号、毎日新聞社70-73
- 9) 高尾亮一(1980): 宮殿をつくる: 求龍堂、139-140に「ある少壮の庭園設計家」としてこのエピソードが紹介されている。
- 10) 昭和35年(1960)6月17日~12月20日にかけて、目通径30cm以上の樹木を対象に宮内庁職員により調査を実施した。
- 11) 宮内庁による実施設計段階(昭和38年(1963)5月9日)において決定した。
- 12) 先述した吉村の概略設計図にも登場するように基本設計にも流れがあったが地形を無視した形であった。
- 13) 「右近の橋、左近の桜」が有名だが、桜が梅に代わって植えられたのは西暦963年のことそれまでは、左近の梅であった。
- 14) 3つの赤石のうち、真中の大ぶりの赤石の下には奈良の大神社からの工事安全祈願の護符が桐箱に入れて埋められた。
- 15) 文献9、147-148に詳しいエピソードが記述されている。
- 16) この呼称は正式なものではない。しかし、窓からの眺め、借景となる樹林・樹木に手を入れ、補植して景観を整えた結果は庭とも呼べよう。
- 17) 文献9、140-141
- 18) 後に類似の芝山にウメを配したデザインの庭園が昭和49年(1974)迎賓館赤坂離宮の和館の庭としてつくられる。建築設計: 谷口吉郎、造園設計: 岩城亘太郎、施工: 岩城造園(株)。

名 称: 皇居 宮殿

所在地: 東京都千代田区千代田1番1号

発 注: 宮内庁

基本設計: 吉村順三 実施設計: 臨時皇居造営部
施 工: 宮殿造営工事共同企業体(大林組、鹿島建設、清水建設、大成建設、竹中工務店)

造園施工: 宮内庁庭園課、富士植木、日比谷花壇、構木造園土木、(加勢造園、)東光園緑化、昭和造園、豊前屋庭石店、小倉庭石店

規 模: 建築面積12169㎡、庭園面積約35505㎡

施工期間: 昭和39年6月29日~昭和43年10月15日